

# Why Always *Middlemarch*?

—Will Ladislaw 再考—

藤 田 眞 弓

**Synopsis:** This paper aims to rethink the role and character of Will Ladislaw in George Eliot's *Middlemarch*. His characterization has been regarded as an artistic failure for the simple reason that his character is not convincing or is incompatible with the narrative mode of *Middlemarch*. But, instead of dismissing him as the sole defect of this great work of fiction, we should rather focus on his functional role in the text.

Though *Middlemarch* has no authoritative voice that may control other narrative voices, it seems to need a textual force which fulfills the heroine's wishes and induces the readers to sympathize with her. For the realization of this type of narrative, George Eliot has created an ideal character in Will Ladislaw.

Just as the text of *Middlemarch* itself aspires to tell the story in multiple voices, we are obliged to interpret this enigmatic character from multiple perspectives.

## 序

George Eliot の *Middlemarch: A Study of Provincial Life* (1871–72) (以下 *Middlemarch*) は Eliot の作品群においてのみならず、イギリス文学史における最高傑作のひとつであると評されている。本作は出版当初から評判が良く、作家の死後 10 年程経った 1890 年頃から 20 世紀の半ばにかけてモダニズムの台頭により一時期その評価は落ちてしまったものの、Virginia Woolf によるかの有名な「大人の為に書かれた数少ないイギリス小説のひとつ」(Woolf 213) という言葉と F. R. Leavis の *The Great Tradition* (1948) によりその評価は決定的なものとなり、現在に至っている。

*Middlemarch: Critical Approaches to the Novel* (1967) の編者 Barbara Hardy が「もしも最も偉大なイギリス小説を決める為の投票が行われたならば *Middlemarch* が他のどの小説よりも多くの票を獲得するだろう」

(Hardy 3) と述べている一方で、*Modern Critical Interpretations: George Eliot's Middlemarch* の編者 Harold Bloom は序で以下のように述べている。

Rereading *Middlemarch* makes me unhappy only when I have to contemplate Will Ladislaw, an idealized portrait of George Henry Lewes, George Eliot's not unworthy lover. Otherwise, the novel compels aesthetic awe in me, if only because it alone, among novels, raises moral reflection to the level of high art. (Bloom 6)

Will Ladislaw の描かれ方に不満を表した批評の中でも最も有名なものは Henry James によるものであろう。

. . . we have not found ourselves believing in Ladislaw as we believe in Dorothea, in Mary Garth, in Rosamond, in Lydgate, in Mr. Brooke and Mr. Casaubon. He is meant indeed, to be a light creature . . . and a light creature certainly should not be heavily drawn. The author, who is evidently very fond of him, has found for him here and there some charming and eloquent touches; but in spite of these he remains vague and impalpable to the end. . . . It strikes us as an oddity in the author's scheme that she should have chosen just this figure of Ladislaw as the creature in whom Dorothea was to find her spiritual compensations. (James 356)

確かに、Will の造型は他の登場人物と趣を異にしている。根無し草でその出生も謎に満ちている彼は Casaubon の従兄弟として突如物語に登場するや、Dorothea に並々ならぬ好意を寄せ、*Wuthering Heights* の Heathcliff よろしく、Dorothea の邪魔をする者や彼女に齒向かう者を次々と罰して行くのだ (Mendelson 118)。W. J. Harvey は、Will の人物造型の不十分さ

は *Dorothea* のキャラクターにも影響を与えかねないと言っている (Harvey 195)。果たして、James や Harvey に倣って我々も Will Ladislaw の人物造型は作家の犯した技巧上の過ちであり、作品の欠点である、と判断を下して良いものであろうか。私には、*Middlemarch* においてのみならず、他の Eliot 作品にも類を見ないこの人物を他の登場人物と同じ地平で解釈しようとするのが誤りのように思われてならない。

そこで本論では Will Ladislaw を「人物」としてよりもそれが果たす「機能」と「役割」に注目することで、この人物の新たな解釈を提案してみたいと思う。

## 1. *Middlemarch* の「偉大さ」

*Middlemarch* の「偉大さ」は地方都市の人々を生き生きと詳細に描写していることに加え、1830年代 (*Middlemarch* が執筆されたのは1869年から1872年にかけてであるが、物語の時代設定は1830年代である)、社会の仕組みが著しい変化を見せていたイギリスの当時の状況を描いていることにもあるだろうし、複数のプロットが複雑に絡み合い「互いの人生が徐々に影響を与え合うようになる様」(MM 95)を描き出している点にもあるだろう。Dorothea, Rosamond, Mary の結婚も重要なテーマであることから、woman question を取り上げていることも *Middlemarch* を「偉大」な小説にしている要素であろう。さらには、「バフチン以降」の私たちならば、David Lodge に倣って *Middlemarch* の語りが「ポリフォニック」であることこそ、この作品の「偉大さ」なのだ、と言うことも出来るだろう。

Lodge は *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism* の3章 ‘*Middlemarch and the Idea of the Classic Realist Text*’ で Bakhtin のポリフォニー論を援用し、*Middlemarch* の形式上の特徴を、一見テキスト中の他のディスコースを統制しようとするように見える全知の語り手のディスコースは、実はミメシスとディエゲシスという二つのディスコースの区別が曖昧になったものであり、*Middlemarch* の語りには複数の「声」(作中の

登場人物の「声」と全知の語り手の「声」が複雑に絡み合っていることを指摘している。事実、*Middlemarch* の語り手は、*Adam Bede* の語り手が一貫して *Hetty* には過剰なまでに冷酷である一方で、*Adam* と *Dinah* については常に好意的な態度を示していたように、偏った「語り」をすることはない。また、*The Mill on the Floss* の語り手が *Maggie* を徹底的に擁護していたように、特定の人物に肩入れをするようなこともない。それまでの *Eliot* 小説においてならば、「利他的」で人生において「高尚」な目的を見出そうとする女主人公 *Dorothea* がテキストの *moral code* を担っている人物として彼女に肩入れをして、その一方で彼女が高い理想を抱いて結婚したはずが、その無能さによって彼女を幻滅させ、自身の死後も遺言書の補足事項により彼女を縛り付けようとした夫 *Casaubon* は徹底的に非難されそうなものである。しかし、これまで多くの批評家によって指摘されてきたことではあるが、「蜘蛛の巣」や「姿見」のメタファーが示唆するように *Middlemarch* の語りは一方的な物の見方を排し、多角的な視座を持つ<sup>1</sup>としている。語り手は自ら、かの有名な「何故いつも *Dorothea* なのか」の一節である一つのイベントもそれに関わったそれぞれの人物によって様々な見方がなされる、とはっきりと述べている。

One morning, some weeks after her arrival at Lowick, Dorothea – but why always Dorothea? Was her point of view the only possible one with regard to this marriage? I protest against all our interest, all our effort at understanding being given to the young skins that look blooming in spite of trouble; for these too will get faded, and will know the older and more eating griefs which we are helping to neglect. In spite of blinking eyes and white moles objectionable to Celia, and the want of muscular curve which was morally painful to Sir James, Mr Casaubon had an intense consciousness within him, and was spiritually a-hungred like the rest of us. (*MM* 278)

この一節は本来なら語り手が女主人公にばかり肩入れをしないようにその語りを抑制する機能を果たすはずである。この一節の後、*Casaubon* の内面が彼の自由間接話法を織り込みながら描出されるが、実際にはテキストの、そして読者と批評家の関心は専ら *Dorothea* にあり、*Casaubon* が読者の関心と同情を集める事は難しく、後は早くも第 3 部のタイトル ‘*Waiting for Death*’ (実際第 3 部で死ぬのは *Fetherstone* であり、*Casaubon* は第 5 部 ‘*The Dead Hand*’ で死ぬのであるが) が示唆するようにその死が待たれるのみである。

語り手が自ら宣言するように、多角的な視座を持って、ある特定の「声」に権威を持たせないはずの語りによって語られているはずの物語が、何故 *Dorothea* への関心と同情を集めているのであろうか。この点が、実は *Will Ladislaw* の人物造型と関わっていることを本論では指摘したい。

## 2. *Dorothea* は本当に「賞賛すべき」ヒロインなのか？

*Dorothea* は 16 世紀スペインの聖 *Theresa* のような生涯を送ろうと志す情熱的な理想主義者として描かれている。自分を「無知から解放してくれ、・・・人生の壮大な道へと導いてくれるような人物」(*MM* 29) が理想的な結婚相手だと信じて彼女は年齢の離れた *Casaubon* の伴侶として彼の研究 *Key to all Mythologies* の完成を手助けすることで人生の目標を叶えようとする。しかし、夫の研究が不毛であることが分かるとその結婚に幻滅を覚え始める。夫が発作で倒れた後は果たしてこの結婚が自分の思い描いていたものであるのか、疑問を抱きながらも献身的に夫を支える姿が描写されている。

*Dorothea* の利他的な精神と献身的な姿を描いている場面においても、語り手は彼女の鈍感で自己中心的な側面にも触れることを忘れない。*Dorothea* と *Celia* が母の形見分けをする場面で物語は始まる。社交界に出て行く年齢に達しようとしている *Celia* が宝飾品に興味を持つのは至極当然のことだと思われるが、そんな妹に向かって *Dorothea* は人前で宝石を身につける

ようになったら「どれほど自分の身が墮落することになるか分からない」(MM 14)と発言し、Celiaを困惑させ、傷付ける。この1章を通して、語り手はDorotheaの美德を賞賛する一方で彼女の極端に走りやすい性格と鈍感さにも触れている。

She was open, ardent, and not in the least self-admiring; indeed, it was pretty to see how her imagination adorned her sister Celia with attractions altogether superior to her own, and if any gentleman appeared to come to the Grange from some other motive than that of seeing Mr Brooke, she concluded that he must be in love with Celia: Sir James Chettam, for example, whom she constantly considered from Celia's point of View, inwardly debating whether it would be good for Celia to accept him. (MM 10)

この一節は一見Dorotheaの謙虚さを語っているようにも思えるが、明らかに自分に求婚しているSir JamesをCeliaの求婚者と看做している点は彼女の鈍感さを示している。(そして実際、その勘違い故に幾度となく彼を傷つけている。)一方で、Celiaについては姉よりも“common-sense”(MM 7)があり、“knowing and worldly-wise”(MM 9)故に周囲の評判が良いと、語り手の価値判断ではなく、町の人々がそう評価していると述べている。

語り手は宝石の分配に関する二人の考え方のどちらが正しいとも正しくないとも意見することはないので、これについては読者が判断しなければならないが、この章の冒頭でDorotheaが質素な服装を好むことが好意的に語られた後に、彼女が宝石の所有を拒否しようとするところから、Eliot文学に特有の女性のrenunciationやself-denialのテーマが本作でも見られることを期待する読者にはDorotheaの意見こそ共感できるもので、Celiaの考えはあまりに世俗的に写るかもしれない。宝石を分配することの正当性はともあれ、この口論の後姉妹が仲直りをする際にも、相手の感情を理解しようと

し、折れるのは Celia の方である。

As Celia bent over the paper, Dorothea put her cheek against her sister's arm caressingly. Celia understood the action. Dorothea saw that she had been in the wrong, and Celia pardoned her. Since they could remember, there had been a mixture of criticism and awe in the attitude of Celia's mind towards her sister. The younger had always worn a yoke; but is there any yoked creature without its private opinions? (*MM* 15)

このように Dorothea が他人の感情に鈍感なことは物語の冒頭からすでに仄めかされているのだ。作品の第 1 部 'Miss Brook' では Dorothea が近視であることが繰り返して言及されているが、この近くのものしか見えないという性質は彼女が対人関係において周囲の人々の心を読み取ることができないということを暗示していると解釈することができないだろうか。そしてこの Dorothea の鈍感さは、ちょうど彼女が Casaubon との結婚に幻滅した頃から顕著になる。Casaubon は過労が原因の発作で倒れるが Lydgate が駆けつけ、適切な処置をしたことにより、大事には至らない。Lydgate が Casaubon の健康のために遵守するように Dorothea に命じたのは、過度な仕事を避け、いかなる精神的なショックも彼に与えてはいけない、ということのみであった。しかしこの時既に結婚に幻滅を覚えていた Dorothea は「あと 15 年以上は長生きする」(*MM* 288) という Lydgate の発言に青ざめ、その後も「もし Lydgate の言った通り彼が 15 年、もしくはそれ以上生きるのであれば、自分の人生はきっと彼を助け、従うだけの人生になってしまうだろう」(*MM* 479) と思い悩む。勿論、Dorothea が夫の死を望んでいるなどということは語り手によっても、彼女自身の口からも語られることはないが、彼女は幾度となく Lydgate の忠告を守らず、夫に精神的なショックを与え、彼を心配させることを繰り返すのだ。

37 章で彼女は夫に対し、Will が Middlemarch に留まり、Brooke 氏を

手助けすることで定職を得る事に同意すべきだと発言し、知らず知らずのうちに夫の気分をますます害し、(“Meanwhile Dorothea’s mind was innocently at work towards the further embitterment of her husband” [MM 370–71]) 更には Casaubon が Will のことをあまりに悪く思いすぎていると非難した上で、自分たちの有り余る財産を彼に分け与えるよう提言し、彼を激怒させる。

第4部の最終章が以下のように Dorothea が優しく夫に寄り添う場面で終わることで Dorothea の鈍感さは和らげられているように思われる。

‘Dorothea!’ he said, with a gentle surprise in his tone. ‘Were you waiting for me?’

‘Yes, I did not like to disturb you.’

‘Come, my dear, come. You are young, and need not to extend your life by watching.’

When the kind quiet melancholy of that speech fell on Dorothea’s ears, she felt something like the thankfulness that might well up in us if we had narrowly escaped hurting a lamed creature. She put her hand into her husband’s, and they went along the broad corridor together. (MM 427)

しかしながら、詳細にこの一節を読んでもみると、Dorothea の夫に対する思いが、彼を労る気持ちというよりむしろ、「足の不自由な動物をかろうじて傷付けずに済んだ時」に我々が感じるものに似ていることがわざわざ言及されている。この表現を Dorothea が思いついたとは考えにくいので、語り手による介入なのであるが、この場面の直前 Casaubon が妻の沈黙を守り、夫に従順に振る舞う姿は “an assertion of conscious superiority” (MM 418) であると思っていることが彼の自由間接話法で示されていることを考え合わせるとこの一節もただ Dorothea の献身的な姿を示しただけのものではないことが分かる。



Dorothea が夫に与えた最後で最大の心労は恐らく彼が自分の死後も *Key to all Mythologies* の研究を続けて欲しいと願い出た際の彼女の反応である。“I cannot give any pledge suddenly – still less a pledge to do I know not what.” (MM 478) という発言から Casaubon は妻が自由を欲している事と自分の研究を信頼していない事を察する。一方その晩 Dorothea が思うのは、夫の研究の不毛さばかりであり、自分が彼と結婚したのは、その研究を手助けするためであったが、それは「自分が献身的に奉仕できるようなもっと偉大な研究であるはず」(MM 479) だと考えたからである。Dorothea が返事をするると約束した翌日に夫は亡くなるので彼女の決意は口にされることはなく、また語り手によっても Dorothea は夫の研究を引き継ごうと決心していただろうと仄めかされるが、自由間接話法などによって彼女の思いがはっきりと読者に知らされることはない。従って、この先 Dorothea が夫の研究を引き継がないとしても（そして実際にそうしないのであるが）彼女は決して夫に対して不誠実だったという印象をその他の登場人物や読者に与えることはないのである。このように読んで見ると、Dorothea の何気ない、しかし夫の側から見れば心ない挙動が彼に心労を与え続け、殺意が無くともじわじわと彼を死に追いやった原因となっていることが分かる。Dorothea の近視や、Celia や Sir James を意図せず傷つけたことは、夫との関係において彼女が相手の心を読み取り、理解しようとする力と努力を欠いていたことの伏線となっているのではないだろうか。

Casaubon がローマから帰国した後の妻 Dorothea, Celia, Sir James, Will（そして恐らく読者もそうであろうが）から Dorothea の妻としてふさわしくないと思われ、好意を持たれない原因は完成しても価値は無いであろう *Key to all Mythologies* の研究に頑なに取り組んでいくことに象徴される無能さにあるのではない。語り手が何度も触れているように、Casaubon の悲劇は、彼が人からの同情や哀れみに尻込みしてしまうという性格から起きているのである。

He had not had much foretaste of happiness in his previous

life. To know intense joy without a strong bodily frame, one must have an enthusiastic soul. Mr Casaubon had never had a strong bodily frame, and his soul was sensitive without being enthusiastic. . . . His experience was of that pitiable kind which shrinks from pity, and fears most of all that it should be known: it was that proud narrow sensitiveness which has not mass enough to spare for transformation into sympathy, and quivers thread-like in small currents of self-preoccupation or at best of an egoistic scrupulosity. (MM 279)

Casaubon は Dorothea との結婚を決めた時も、Will が Middlemarch に留まることについて Brooke 氏や Sir James に相談をしようかどうか迷っていた時も、Lydgate に自分の病状を尋ねる時も、他人からの同情や哀れみを受けることを非常に恐れ、親密な関係を築くことが出来ない。Will からの手紙を受け取って Casaubon が憤りを感じた際、語り手がわざわざ括弧書きで “. . . must not we, being impartial, feel with him a little?” (MM 375) と彼への同情を促すも、結局彼は過労が原因の発作と、それに続く Dorothea と Will によって与えられた精神的なショックにより、テキストから姿を消すことを余儀なくされる。繰り返すが、二人の結婚の失敗の原因は、従来考えられてきたように Casaubon の無能さと Dorothea の夫に対する幻滅というよりはむしろ、Dorothea の鈍感さと、Casaubon の臆病さであったのだ。

### 3. Will Ladislaw の人物造型再考 (i)

Casaubon の自身の研究に対する悩みや対人関係における臆病さが、Dorothea の苦悶と同様に詳細に語り手の言葉と、自由間接話法の両方によっても語られるも、読者や批評家が Dorothea にばかり関心と同情を寄せてしまうのは何故であろうか。Middlemarch においてはテキスト全体を支配

する権威的なディスコースが存在しないと考えると、何か別の要因があるのではないだろうか。私には、この点が Will の人物造型と関わっているように思われる。

Eliot 作品の登場人物分析はともすればキャラクター批評に陥りがちであったが、W. J. Harvey は、Eliot の作品には主として「機能」を果たすための登場人物が存在すると指摘し、それらを 3 つのカテゴリーに分類している。一つ目は“person”というよりはむしろプロットの為の“mechanism”としての役目を果たす人物である。二つ目は作品の道徳的規範(“moral norm”)を言明する“person”というよりはむしろ“voices”である人物。そして三つ目は二つ目と同様に“voices”の役割を付与されるが、個人のそれではなく、集団や社会、共同体の“voices”を持つ人物たちで、彼らは“background”や“chorus”のような役割を果たす (Harvey 151)。Harvey は一つ目のカテゴリーに含まれるのは作中 minor な人物が多いと述べているが、私には、*Middlemarch* においては決して minor な登場人物ではない Will もこのカテゴリーに含まれるのではないかと思われる。

テキスト中、Will はしばしばロマン派詩人の比喻で語られることがある。例えば Cadwallader 夫人は Will のことを “[A] sort of Byronic hero” (MM 380) と、Brooke 氏は “a sort of Burke with a leaven of Shelley” (MM 499) と形容している。Will と Dorothea がお互いを必要としている時に雨や雷といった自然現象を味方に付けて彼が彼女の元にやって来ることとその願望を叶えている場面が 2 度あることも、Will の人物造型がロマン派のモードと深く関わっていることを示唆しているのではないだろうか。<sup>2</sup> 83 章では二人が互いの愛を確認し合う場面において雷が鳴り、彼らは「まるで子供のように」(MM 810) と表現されている。*Middlemarch* のテキストにロマン派のモードで語られる Will は異様な存在であるかの印象を与える。その上、彼の Dorothea への愛は突如芽生えた上に、その激しさばかりが強調され(最終的に二人が愛を確認する場面で落雷があるのはその激しさの象徴のように思われる)、彼がそこまで彼女を愛する理由や動機は不明のままである。Lydgate と Rosamond のプロットや Bulstrode のプロットと比較

すると二人の恋愛における動機付けの弱さは一目瞭然である。Dorothea に対する突然の強い愛は、元々彼が自分に援助をしてくれていた Casaubon への反抗心から生じたと考えられなくもないが、我々はテキストを読み進めるうちに、Dorothea への愛故に Will が Casaubon を忌み嫌うようになっているようにも思われるのだ。いずれにせよ、Will と Dorothea のプロットにおける動機付けは *Middlemarch* の他のパートよりも複雑さ、精巧さの点で劣っているように見えるのだ。*Middlemarch* において動機付けがいかにか重要な要素で、これこそが本作の魅力のひとつであることは David Lodge が *The Art of Fiction* の中の「動機づけ」(‘Motivation’) について解説する章で *Middlemarch* を取り上げ、こう述べていることから明らかである。

Motivation in a novel like *Middlemarch* is a code of causality. It aims to convince us that the characters act as they do not simply because it suits the interests of the plot . . . but because a combination of factors, some internal, some external, plausibly cause them to do so. Motivation in the realist novel tends to be, in Freudian language, “overdetermined,” that is to say, any given action is the product of several drives or conflicts derived from more than one level of the personality; whereas in folk-tale or traditional romance a single cause suffices to explain behavior – the hero is always courageous because he is the hero, the witch is always malevolent because she is a witch, etc. . . . (Lodge, *The Art of Fiction* 183)

しかし、ここでもまた Dorothea と Will のプロットの動機付けが弱い点を作者 Eliot の技巧上の過ちであり *Middlemarch* の欠点であると判断を下すのは性急なように思われる。Will という人物を他の人物と同じ地平で捉えることから脱却することで（そして彼がロマン派のモードで語られることは、そうするように我々の注意を喚起する一種のマークのように思われるのだが）この人物を改めて評価、解釈できるのではないだろうか。

ローマ滞在中に Dorothea は夫と研究について口論をし、その際の彼女の “I never heard you speak of the writing that is to be published.” (*MM* 201) という言葉は Casaubon にとって「最も慰めを必要としているところにおいて彼の心を残酷にも掻き乱す」(*MM* 202) 結果となる。口論の後、彼女はイギリスに帰国した後続く憂鬱な生活を想像するも、そこには「怒りや失望に勝る何かがある」(*MM* 203) はずだ、と一筋の希望を見出そうとする。ちょうどその時、夫の不在時に Will が Dorothea の元を訪れるのだ。彼は「Casaubon を締め付け、あの思い上がった労作を無駄なものにしてやろう」(*MM* 208) という思いから Dorothea に Casaubon の研究は不毛であると断言する。そしてそれを聞いて心を痛める彼女を見て、Will は “[S] he was an angel beguiled” (*MM* 209) だと思う。

She must have made some original romance for herself in this marriage. And if Mr Casaubon had been a dragon who had carried her off to his lair with his talons simply and without legal forms, it would have been an unavoidable feat of heroism to release her and fall at her feet. But he was something more unmanageable than a dragon: he was a benefactor with collective society at his back, and he was at that moment entering the room in all the unimpeachable correctness of his demeanour, while Dorothea was looking animated with a newly aroused alarm and regret, and Will was looking animated with his admiring speculation about her feelings. (*MM* 209)

. . . Will Ladislav always seemed to see more in what she said than she herself saw. Dorothea had little vanity, but she had the ardent woman’s need to rule beneficently by making the joy of another soul. Hence the mere chance of seeing Will occasionally was like a lunette opened in the wall of her prison, giving her a glimpse of the

## sunny air . . . (MM 361)

上記一つ目の引用において、Will は自分が「英雄のとるべき行為」として「竜」である Casaubon から Dorothea を「救出」せねばならないと彼の思いがロマンスのモードで Will の自由間接話法で語られている。二つ目の引用では Dorothea が自分の状況を幽閉の身に喩え、そこから彼女を救済してくれるのは Will の他には居ないことが述べられている。これらの引用はそのモードの違いからも *Middlemarch* のテキストにおいて異様な印象を与えるが、この後、これらの言葉通り Will は Dorothea が彼に会いたいと願った時は必ず現れ、彼女を夫から救う英雄よろしく Casaubon を Dorothea に成り代わり激しく非難していくのである。Will の Dorothea への思いは日増しに強くなり、「自分は過去に Casaubon に大いに恩義を受けたが、彼が Dorothea と結婚したことでその恩義も相殺された」、そして「Casaubon は Dorothea と結婚したことで彼女を不当に処遇していることになる」(MM 360) とまで考えるようになる。Will にとって過去の経験や恩恵などは自分と Dorothea の為ならば容易に帳消しにできてしまうものなのだ。従って、Casaubon から援助を受けながら芸術家を志していたにも関わらず、特に強い動機や意思もなくジャーナリストや社会活動家になる決意ができてしまうのだ。Eliot 作品においては、多くの登場人物たちが過去との絆を求めていたり過去の辛い経験や犯してしまった過ちに呪縛されたりしている。例えば、Maggie は幼少期の Tom や Philip との絆を Steven と駆け落ちをした後に取り戻そうと苦しみ、Silas は青年期に友人に騙されたことがきっかけで人間不信に陥っている。Tito や Bulstlode は過去に犯した過ちの因果応報を受けている。Will は *Middlemarch* においてロマン派やロマンスのモードで語られる点のみならず、過去との結びつきが現在の性格や運命を決定付けるという Eliot 作品における重要な主題からも逸脱しているのだ。Will と Dorothea が逢瀬を重ねることで Will が彼女に惹かれていったという経緯は無い。Will は自分をロマンスのモードに置く事により、Dorothea を愛することの動機付けとしているように思われる。先に引用した Lodge の言

葉にも英雄は英雄であることだけで行動の説明がつく、とあったが、Will の場合にも同じことが言える。この点では、夫 Lydgate の不在に音楽を奏でながら長い時間をともにしていた Rosamond が自分と Will のロマンスを想像していることの方がよほど強い動機があると言えよう。

Dorothea の言動が Casaubon の心労の原因になっていたことは先にも述べたが、それ以上に Will はその存在そのものも Casaubon の心を掻き乱す原因となっている。

Poor Mr Casaubon felt . . . that no man had juster cause for disgust and suspicion than he. Young Ladislaw, he was sure, meant to defy and annoy him, meant to win Dorothea's confidence and sow her mind with disrespect, and perhaps aversion, towards her husband. Some motive beneath the surface had been needed to account for Will's sudden change of course in rejecting Mr Casaubon's aid and quitting his travels; and this defiant determination to fix himself in the neighbourhood by taking up something so much at variance with his former choice as Mr Brooke's Middlemarch projects, revealed clearly enough that the undeclared motive had relation to Dorothea. Not for one moment did Mr Casaubon suspect Dorothea of any doubleness: he had no suspicions of her, but he had . . . the positive knowledge that her tendency to form opinions about her husband's conduct was accompanied with a disposition to regard Will Ladislaw favourably and be influenced by what he said. (*MM* 375-76)

この一節は Will からの手紙を受け取った直後の Casaubon の反応を描写している。Casaubon の Will と Dorothea の間柄に関する推測は当たっており、妻の心境の分析は的を射ている。(彼がこの鋭い洞察力を、“mythology”の分析に活かせなかったことは皮肉でしかない。)ここで重要なのは、

「Will の意図に対して彼が抱く疑惑と嫉妬と、Dorothea が Will から受けている印象に対する疑惑と嫉妬が絶えず彼の心の中で織物を織り上げる」(MM 419) かのよう、Will の存在と彼の挙動が Casaubon に精神的な負荷を与えていることである。Casaubon は例の「人からの同情と哀れみに尻込みする」性格から、Will と妻の関係について誰に相談することも出来ず、その心労は増すばかりである。Dorothea 同様、というよりはむしろ Dorothea が望んでいたからこそ、Will は間接的にはあるが Casaubon を死に至らしめることに加担しているのだ。Casaubon の死後、Will が彼の死を悼んだり、彼に対して取った言動を悔やんだりしている様子はない。それどころか、Will は the Pioneer の業務で忙しい一方で、Dorothea が未亡人になったことを気にかけてばかりいるのだ。

Will が Dorothea と結ばれる為に邪魔になっていたのは Casaubon だけではない。Will の目から見ると、彼の出生を訝しく思う Dorothea の親族たちも二人の障害になっている。Celia は Casaubon の遺言の補足条項について、“It is as if Mr Casaubon wanted to make people believe you would wish to marry Mr Ladislav – which is ridiculous.” (MM 490) と述べているが、この言葉はまさに本質を突いている。この言葉に続いて Celia は Sir James や Cadwallader 夫人が Will と Dorothea の結婚はあり得ないものであると考えていることを姉に伝える。夫の遺言と周囲の反対によって Will と結ばれることが不可能であることを知ると、Dorothea は突然 Will への愛情を激しく感じるようになる。

. . . it was a violent shock of repulsion from her departed husband, who had had hidden thoughts, perhaps perverting everything she said and did. Then again she was conscious of another change which also made her tremulous; it was a sudden strange yearning of heart towards Will Ladislav. It had never before entered her mind that he could, under any circumstances, be her lover : . . . .  
(MM 490)



ここで注目すべきは、Dorothea のこの激しい変化が Will の積極的な働きかけによるものではないことである。彼は *Middlemarch* を去ると宣言してから 2 ヶ月も、特にこれといった意図や目的もなく無為に町に留まり、自分がまだこの町に滞在しているという噂を流し、最終的に Dorothea に彼と結婚したいと思わせることに成功する。先に Mendelson の表現を借りて、Will を Heathcliff に喩えたが、より正確に表現するならば、Will は自ら行動を起こす情熱を欠いた Heathcliff である。Will は *Middlemarch* のテキスト、および *Middlemarch* という虚構の地方都市における “catalyst” の役割を担っているのである。自らは変化、成長することはないが、彼の存在によって周囲の人物が劇的に変化することを余儀なくされているのである。

#### 4. Will Ladislaw の人物造型再考 (ii)

Romola と違い、Dorothea は理想的な人物でも我々からかけ離れた人物でもない。彼女は間違いを犯し、嘲笑され、批判され、同情され、そして賞賛もされる (Ashton 317–18)。語り手が彼女の近視眼的な物の見方を皮肉を込めて伝えているのに加えて、作中の登場人物による彼女に対する所見も我々の Dorothea 評価に影響を与えている。Celia はしばしば「Dorothea はいつも極端に走りやすい」(MM 47) といった趣旨の発言をし、Cadwalader 夫人は「Brooke 嬢は昼の日中に星を見ることを人に要求する」(MM 59) 変わり者だと述べている。しかしテキストが誘導する Dorothea への関心の持ち方とは、嘲笑され、批判される対象としてというよりかはむしろ賞賛されるべき対象としてなのである。語り手や登場人物の言葉とは裏腹に Dorothea が物語の最後まで賞賛されるべき人物である、という印象を与えていることに Will の人物造型が関わっているのである。

Will はローマで Casaubon の不在中に初めて Dorothea と二人きりで会うのだがその時早くも「Dorothea が Casaubon のような夫を崇拜していることは耐えられないことである」(MM 207) と感じる。Will の Dorothea 崇拜は彼の自由間接話法で示されることもあるが、Rosamond とのやり取

りにおいてより明確になっている。Rosamond と Will の間柄を勘違いしている Dorothea に自分の好意を彼女に説明しようと Rosamond に言われると、Will は以下のように反論する。

‘Explain! . . . I never had a *preference* for her, any more than I have a preference for breathing. No other woman exists by the side of her. I would rather touch her hand if it were dead, than I would touch any other woman’s living.’ (MM 778)

Will は自分でも Dorothea に寄せる愛情は説明ができないものだと認めている。Rosamond がこの言葉を受け明らかに傷ついているのを横目に自分は（多くの時間を共に過ごしたにも関わらず）「この女性とは今まで何ら結びつきを感じたことはない」(MM 779) と彼女に何ら憐れみの情も示さない。Will にとって女性は崇拝すべき対象であり、それは Dorothea ただ一人である。Rosamond は初めて Dorothea に会った後に、Dorothea と比べられる女性はこの世には居ないと発言した Will に向かって “You are devout worshipper” (MM 436) と言っているが、Will のこの敬虔なまでの崇拝振りがテキストの至る所で見られることにより、そこまで一人の男性から崇拝される女性はいきなり賞賛され、崇められる対象になるはずである、と読者に印象付けているのではなからうか。この点においても、やはり Will Ladislaw はキャラクターというより、テキストに特定の効果をもたらす機能としての役割を果たしているのである。

## 5. “Home Epic” としての *Middlemarch*

Casaubon 亡き後、Will は Casaubon の遺書の補足事項が契機となり Dorothea の再婚相手の候補に躍り出る。Sir James が Celia と結ばれてしまった今となっては、作中人物の中で Dorothea の再婚相手となり得るのは Will しか居ない。

結婚が *Middlemarch* のテーマのひとつであることには異論はないであろう。Eliot 作品において、本作ほど結婚を中心に物語が展開している作品はない。4 つあるプロット全てが結婚と結婚後の夫婦の問題を中心としている。Dorothea プロットは Casaubon とそれに続く Will との結婚が中心である。Lydgate プロットは彼が Middlemarch に医療改革をもたらそうと高い志を持っていたが Rosamond と結婚したことで、London の一開業医としてその生涯を終える過程を描いている。Bulstrode プロットは、Mark Schorer の分類によると “money story” (Schorer 12) であるが彼の醜聞が広がり Middlemarch の人々の信用を失った後も妻が献身的に夫を支える姿が詳細に語られることから (第 74 章, 85 章), これも結婚と夫婦間の問題を扱っていると考えて良いだろう。Fred と Mary のプロットは二人の成長と恋愛, 結婚を中心に展開している。Finale において語り手は, “Who can quit young lives after being long in company with them, and not desire to know what befell them in their after-years?” (MM 832) と述べ, 登場人物たちの後日談を紹介している。それは Mary と Fred の結婚生活に始まり, Lydgate と Rosamond の夫婦のその後および夫の死後彼女が再婚をしたこと, そして Will と Dorothea の夫婦に子供が生まれ, その知らせを受けた Celia と Sir James が喜んでいる様子である。*Middlemarch* は勿論その副題が示唆するように, 第一次選挙法改正や医療改革を経験した一地方都市をその住民を中心に描くことを主眼としているが, その根底に流れる重要なテーマは結婚とその後の物語なのである。

Marriage, which has been the bourne of so many narratives, is still a great beginning, as it was to Adam and Eve, who kept their honeymoon in Eden, but had their first little one among the thorns and thistles of the wilderness. It is still the beginning of the home epic. . . . (MM 832)

Will に惹かれる気持ちはあったものも, Dorothea は Celia に再婚する気は

無く、結婚前のように「広い土地を手に入れ、干拓し、小さな集団農場を作る」という「素晴らしい計画」(MM 550)に取り組むつもりだと語る。また、Bulstrode に代わって Lydgate の携わる新病院の設立を支援するなど、社会貢献に身を捧げようとする。しかし、Dorothea がテキストの **moral code** を体現する人物であるならば、彼女の物語こそ結婚をもって終わらなければならない。そこで Will が Dorothea の結婚相手になることにより、彼女の物語も **home epic** を紡ぎだすことに成功するのである。

## 結 び

以上見てきたように、*Middlemarch* の登場人物の中で他の人物に比べて説得力が無く、異様な存在に思われる Will Ladislaw の人物造型は彼を自律した「人物」として見るのではなく、彼が担っている「機能」、「役割」に注目すればこのことが本作の欠点であるとは言えないのである。

ひとつの語りに権威を持たせない語りを実践しようとする本作においても、従来の作品同様、作品の **moral code** を体現する主人公に対して、その願望を叶え、かつ、読者が感情移入出来るようにするには、それを実現することに特化した登場人物が必要であったのだ。Will は Dorothea の代わりに彼女を苦しめる夫を執拗なまでに非難し、死に至らしめ、その性格上の欠点や人生における挫折、失敗といったものが多く語られるにも関わらず Dorothea が他の登場人物や読者から賞賛されるべき人間であることを印象付けるため、彼女を徹底的に崇拜する。そして、**home epic** という作品全体の根底に流れるテーマに Dorothea の生き方を合致させるため、最後には彼女の再婚相手となる。

*Middlemarch* のテキストが複数の声で語ること、複眼的な視点を持って語ることを目指したように、我々も Will Ladislaw を他の登場人物と同じ視点から一義的に解釈するのではなく、多角的に彼を解釈すべきであるのかも知れない。

**Notes**

<sup>1</sup> *Middlemarch* における「蜘蛛の巣」や「姿見」メタファーについては、Mark Schoreer の “Fiction and the ‘Matrix of Analogy.’” (First published in *The Kenyon Review* 11 (1949). Rept. in Bert G. Hornback ed., *Middlemarch*. A Norton Critical Edition. New York: W. W. Norton & Company, 2000. 587–92.)

J. Hillis Miller, “Optic and Semiotic in *Middlemarch*.” (First published in *The Worlds of Victorian Fiction*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975. Rpt. in Harold Bloom ed., *George Eliot’s Middlemarch*. Bloom’s Modern Critical Interpretations. New York: Chelsea House, 1987. 9–25.)

などに詳しい。

<sup>2</sup> Will と自然の関係については、Edward Mendelson 著 *The Things that Matter: What Seven Classic Novels Have to Say about the Stage of Life*. (New York: Anchor Books, 2007) の第4章 “Marriage: *Middlemarch*” に詳しい。

**Bibliography**

- Ashton, Rosemary. *George Eliot: A Life*. Allen Lane: Penguin, 1996.
- Bakhtin, M. M. *The Dialogic Imagination: Four Essays*. Trans. Caryl Emerson and Michael Holquist. Ed. Michael Holquist. Austin: University of Texas Press, 2006.
- Bloom, Harold, ed. *George Eliot’s Middlemarch*. Bloom’s Modern Critical Interpretations. New York, New Haven and Philadelphia: Chelsea House, 1987.
- Carroll, David R., ed. *George Eliot: The Critical Heritage*. The Critical Heritage Seri. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- “catalyst.” *The Oxford English Dictionary*. 2<sup>nd</sup> ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 2009.
- Chatman, Seymour. *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film*. Ithaca and London: Cornell UP, 1980.
- Eliot, George. *Middlemarch*. 1871–72. Ed. Rosemary Ashton. London: Penguin, 2003.
- Hardy, Barbara, ed. *Middlemarch: Critical Approaches to the Novel*. London: The Athlone Press, 1967.
- Harvey, W. J. *The Art of George Eliot*. London: Chatto & Windus, 1963.
- James, Henry. Rev. of *Middlemarch*, by George Eliot. *Galaxy* 15 (1873) : 424–28. Rpt. in Carroll, *The Critical Heritage* 353–59.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. London: Faber and Faber, 2008.
- Lodge, David. *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism*. London and New York: Routledge, 1990.

- . *The Art of Fiction: Illustrated from Classic and Modern Texts*. London: Penguin, 1992.
- Mendelson, Edward. *The Things That Matter: What Seven Classics Novels Have to Say about the Stage of Life*. New York: Anchor Books, 2007.
- Miller, J. Hillis. "Optic and Semiotic in *Middlemarch*." *The Worlds of Victorian Fiction*. Ed. Jerome H. Buckley. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1975. Rpt. in Bloom, *George Eliot's Middlemarch* 9–25.
- Schorer, Mark. "Fiction and the 'Matrix of Analogy.'" *The Kenyon Review* 11 (1949). Rpt. in *Middlemarch*. A Norton Critical Edition. Ed. Bert G. Hornback. New York and London: W. W. Norton & Company, 2000. 587–92.
- "short-sighted." *The Oxford English Dictionary*. 2<sup>nd</sup> ed. CD-ROM. Oxford: Oxford UP, 2009.
- Woolf, Virginia. *The Common Reader: First Series*. London: Hogarth Press, 1968.